

ルー・サロメ～善悪の彼岸・ノーカット版

2006(平成18)年5月16日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・原案・脚本＝リリアーナ・カヴァーニ／出演＝ドミニク・サンダ／エルランド・ヨセフソン／ロバート・パウエル（彩プロ配給／1977年イタリア、フランス、西ドイツ合作映画／127分）

……約20年前にセンセーションを巻き起こしたヨーロッパ映画の名作が、今ノーカット版で再登場！ 19世紀末、天才哲学者ニーチェらと、男2人＋女1人の三位一体の共同生活を実践したルー・サロメは、自由奔放に生きていくことを目指した女性。日本で言えば、さしずめ松井須磨子……？ それから100年後、「性の自由」が過度に進んだ今の日本社会において、あらためてサロメの生き方を確認する意味はどこに……？

19世紀末の華、ルー・サロメとは？

この映画の主人公ルー・アンドレアス＝サロメは、「結婚なんて牢獄と同じ」という思想を持ち、19世紀の男性社会という時代状況の中で何よりも自由を求め、奔放な生き方をした実在の女性（1861～1937年）。彼女は帝政ロシアのペテルブルグ出身だが、若い時にヨーロッパに出て一流の知識人と交流し、数多くの著作を残したとのこと。

ルー・サロメは、男2人＋女1人による「三位一体」の共同生活を始めたが、その奇妙な共同生活の提案を喜んで受け入れたのは若い哲学者のパウル・レー（ロバート・パウエル）。

そして、彼の誘いに乗ったのが世界的に有名な哲学者フリードリヒ・ニーチェ、通称フリッツ（エルランド・ヨセフソン）。今まで全く知らなかった、こんな女性の自由奔放な生き方を描くこの映画は1977年製作のものだが、何と今回はノーカット版！

ノーカット版への期待度は……？

1977年製作のこの映画が、『善悪の彼岸』というタイトルで日本で上映されたのは1985年。そしてそれは、116分の英語版だったそうだが、あまりにもヤバイ性的描写シーンが多かったため、40カ所以上の修正がされたとのこと。ところが今回のものは、イタリア語版のノーカット版であり、修正箇所は4カ所のみだから、数多くの衝撃的な問題のシーンが復元されたとのこと。パンフレットにはその無修正で追加されたシーンが詳細に解説されているため、どうしても私の目はそのシーンに注目していくことに……。

ヌードシーンやセックスシーンの描き方は映画芸術最大の見せどころ(?)だが、何でもモロに見せればいいというものでもない。とりわけ、男の裸のシーンや男同士の同性愛のシーンなどは、どちらかという私は願ひ下げ……？ エッチビデオでも、「いわゆる洋モノより日本モノの方が味わい深い」とか、「昔の日活ロマンポルノは情緒があって良かった」という意見が多いのは当然のこと……？

しかして、この映画におけるそんな無修正シーンの出来は……？ もっとも、勘違いしてもらっては困るのは、この映画のテーマは何もそこだけにあるのではないということ……。

女流監督カヴァーニとは？

リリアーナ・カヴァーニはイタリアの女流監督で、ベルトルッチやベロッキオと並ぶ偉才とのこと。しかし私が知っている彼女が監督した映画は『愛の嵐』(74年)だけ。ナチスドイツの時代を背景として錯綜した性を描いたこの映画は、そのポスターを見たり解説を読んだだけではっきりと印象に残っていたもの。『善悪の彼岸』(77年)もこの女流監督の作品だし、日本の文豪、谷崎潤一郎原作の『卍』を映画化した『卍／ベルリン・アフエア』(85年)もあるとのことだから、女流監督らしく(?)、性の本質と性の表現に執念を持っていたみたい……？ ヨーロッパ映画について、もっともっと勉強しなければ……。

ちなみに、大阪の第七藝術劇場ではこの『愛の嵐』についても、近々ノーカット版を上映するとのことだから、それも観なければ……？

お勉強はニーチェから……？

カヴァーニ監督の『愛の嵐』や『善悪の彼岸』を日本の映画館で観た人は、きっとよほどの映画マニアであり、団塊世代以前の人たちばかりのはず……。したがって今どきの若者に、こんな映画を観てみようという動機を与えることはなかなか難しい……。ましてや、『善悪の彼岸』などという難しいタイトルでは……？

しかし、今どきの大学生がいくらレベルが低下したと言っても、哲学者ニーチェの名前ぐらいは聞いたことがあるはず。もっとも、『善悪の彼岸』がニーチェの著作から取られていることがわかる若者はまずいない。え、私たちが学生運動の時に夢中になって勉強した弁証法などのニーチェの哲学はチンプンカンプンでは……？ もっともリヒャルト・シュトラウスの『ツァラトゥストラはかく語りき』の音楽は、『2001年宇宙の旅』（68年）で使われているから若者もよく知っているはず。

この映画の女主人公ルー・サロメのセックスを中心とした自由奔放で男に縛られない生き方に迫るためには、まずニーチェのお勉強から始めては……？

今はこんな女性はいくらでも……？

パンフレットには、この映画の女主人公「ルー・サロメ」は数多くの著作を残したと書かれているが、私はそれがどんな本なのか全然知らない。しかし、恋多き女であった彼女が付き合った男たちにはニーチェをはじめ「すごい奴」がたくさんいたようだが、彼女自身が特に何かの才能があったのかというと、そうではなさそう……。つまり、映画を観ている限り、はっきりとした物の言い方をし、自由奔放な生き方を実践し、かつ女としての美貌やセックスアピールを駆使することによって、男たちから注目され、チヤホヤされただけ、といえないことも……？

ルー・サロメがすごかったのは、そんな生き方を19世紀末という時代状況において実践したこと。要するに、当時の超少数派の生き方をしたから、目立ったわけだ。そう考えながら、ひるがえって今どきの日本女性の生き方を見れば、女性の解放、男女平等、女性の地位の向上という時代の流れの中、このルー・サロメ程度の生き方をしている女性はゴマンと……。さすがに「三位一体の同居生

活」はありえないだろうが、崩壊すること必然の「三位一体」ではなく、うまく二股、三股をかけている女性はいくらでも……？ そう考えると、ホントに価値のある女性の生き方って一体ナニ……？

フリッツ家の崩壊は……？

こんなルー・サロメと対照的な女性が、フリッツの妹のエリーザベト（ヴィルナ・リージ）。エリーザベトは兄フリッツを敬愛していただけに、フリッツがこんな「魔性の女」ルー・サロメによってたぶらかされ、人生の道を踏み外していくことに激しい憤りを覚え、ルー・サロメを憎み嫉妬したことは当然。しかしルー・サロメは平然としたもの……。

フリッツの母親を巻き込んだフリッツ家の「お家騒動」はどんどん深刻になっていくが、解決策はなく、遂にフリッツは家を出てしまうという最悪の方向に……。三位一体の共同生活が崩れた後も、ルー・サロメのことしか頭にないフリッツは、梅毒に冒され、ついに狂気に至ってしまうが、そんなフリッツを引き取ったのは、結局この実家。精神に異常をきたし、自宅で1人ピアノを弾く、天才哲学者ニーチェの姿には、ただ呆然とするばかり……。

「三位一体の共同生活」は所詮ムリ……？

ルー・サロメが考えた夢は、2人の男性と共同生活をしながら学問をすること。なぜそんな生活が夢なのか私にはよくわからないが、ルー・サロメの魅力にまいてしまったパウルとフリッツの3人がライブツィヒで始めたのが、男2人+女1人による三位一体の共同生活。山崎豊子の『華麗なる一族』には妻妾同衾の生活が描かれていたし、そんな例を出さなくても、一夫多妻制は昔から続いていた制度で、十分合理性の説得力があるもの……？ しかしルー・サロメが理想とした「三位一体の共同生活」は所詮ムリ……。その崩壊の様子は、この映画の中でじっくりと……。

ルー・サロメ VS 松井須磨子

ルー・サロメがヨーロッパにおける自由奔放な女性の生き方の実践者なら、日

本では松井須磨子がそれ……？ 1861年生まれのルー・サロメに対して、松井須磨子は1886年生まれだから、25年の違いはあるものの、彼女らが置かれていた時代状況はよく似たもの……？

松井須磨子は『人形の家』のノラや『復活』のカチューシャ役で有名な「女優」。しかしそれ以上に有名なのが、共に芸術座を旗揚げした島村抱月との間で展開された先駆的な恋愛模様。松井須磨子も恋多き女、自由奔放な生き方を実践した女性として有名だが、ルー・サロメがパウルやフリッツ死亡後も次々と若い男を従えた(?) ことに比べれば、島村抱月が死亡した2カ月後にその後を追って自殺した松井須磨子は、いかにも日本的……？

2006(平成18)年5月19日記

ミニコラム

あなたは『白日夢』を知ってる？

谷崎潤一郎作品のうち、『細雪』『刺青』『鍵』『卍』『春琴抄』等は再三映画化されているから誰でも知っているだろうが、『白日夢』や『紅閨夢』となるとよほどの谷崎ファンでなければ知らないはず。これらは1964年の武智鉄二監督作品だから私の高1時代。当時『スクリーン』と『映画の友』を愛読していた私は、このエッチ度満点の映画を何とか観たいと願ったが、やはりそれはかなわぬ夢だった。しかし、『白日夢』の路加奈子という女優の名前だけは山本富士子、若尾文子、岸田今日子などの大女優と共にしっかりと私の頭の中に記憶されていた。

来る12月16日に開催される谷崎潤一郎記念館での「生誕120周年記念クリスマスイベント」で私は「谷崎文学と映画」というテーマで対談するべく、はじめて『白日夢』のビデオを観ることに成功した。これは、歯科医の診療室で、ある青年が女性と共に治療を受ける際に彼の夢の中で展開される超Hな物語。映画評論家活動の広がりのおかげでこのような対談へのお呼びがかかり、こういう映画を仕事として「堂々と」観ることができる幸せをかみしめている今日この頃だ。

2006(平成18)年11月22日記